



Q 占いをする友達から「あなたは2人の水子に崇られている」と除霊を勧められました。若いとき、2人の子どもを中絶しています。除霊は高額で払いきれません。お金をかけず、この子らの崇りを取れますか？(本部町・Sさん・50歳・女性)

A 「人間の過去は、誰しも補いきれるものではなく、ただただ懐かしさと後悔の涙にくれるもの」という哲学書を読んだことがあります。私がSさんの過去を知る由もありませんが、想像しますに、その当時、相手方の男性との人間関係、Sさんの年齢や社会的立場、経済状況など、お子さまの出産を決断できなかった事情があったのかもしれない。中絶そのものについて、当事者以外の第三者が善悪を判断するものではないと思います。

もしSさんが、自身の過去について罪の意識があるとき、それは中絶したお子さんたちに対する『崇り』とか『怖さ』という感情表現になることもあるのでしょうか。お友達の占いの習熟度にもよりますが、「水子が崇っている」と除霊を勧められたことは、お友達と相談している会話の中で、Sさんからの「水子は崇るもの」「水子は怖いもの」という意思表示が出ていたのかもしれない。『いのち』という観点からとらえたとき、果た

水子＝ミンヌク

して「水子は崇るもの」であり「水子は怖いもの」なのでしょう。か？

ウチナーグチで、水子のことをミンヌクという家庭や地域があります。沖縄の旧盆などの年中行事のとき、しきたりに明るい方々は、自然にあるクワズイモなどの大きめの葉っぱの中に、野菜の角切りに小麦粉などを混ぜて、重箱・ムイグワーシ(盛菓子)・ムイナイムン(盛果物)以外のウサギムン(お供え物)として準備することがあります。

このウサギムンは、お盆の期間中、供養してもらえない無縁仏・水子・地獄の鬼へのお供え物になると、施餓鬼(せがき)と名称が変わるといわれます。また、これをミンヌクということもあります。

この名称からもわかるように、琉球の古いしきたりでは、ミンヌクの水子を『崇り』『怖い』ものと見なされ、トートローメーにウンチケーザれている、ウヤファーフジのありがたいご先祖様に準じてウサギムンを供え、大切に供養を行ってきたのです。つまり、水子といいつつも、等しく大切な人間の『いのち』として敬われてきた歴史があるということですね。

とある大御所のユタの先生がお話しされていました。「ミンヌクはなんにも悪さを

をしないよ。母親にも崇らんよ。ミンヌクを崇っているのは、怖い怖いする母親のあんただよ」と。私は、大御所のユタの先生のお話に、ウチアタイする思いでした。

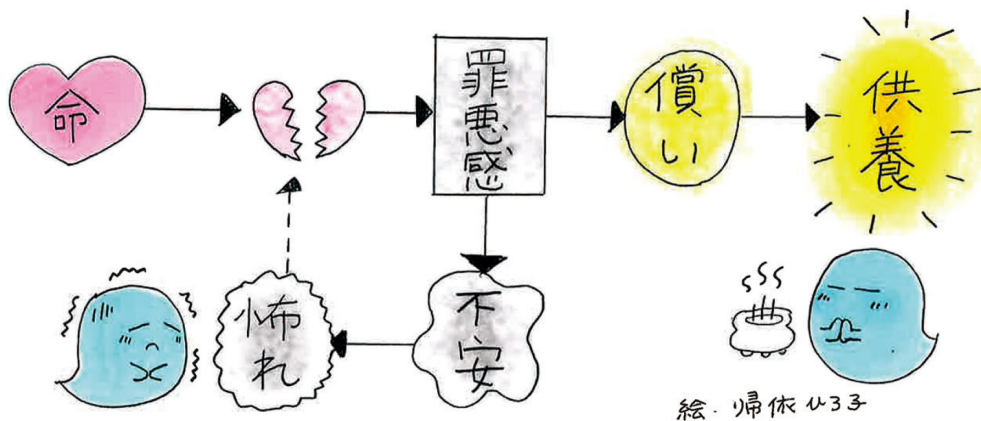
水子の崇りを取るには

今回のご質問への回答に戻りましょう。「お金をかけず、この子らの崇りを取れますか？」という内容でした。ズバリ、取れます！しかも無料で。水子と呼んでいるSさんのお子さんたちは、『崇るもの』『怖いもの』ではなく、どのような事情があれば、Sさんの大切なお子さんたちであるということに気づいていただけるのであれば、それは、ご存命であれば、お亡くなりであれば、大切なお子さんたちに変わりは無いということです。

少し先のことになりましたが、来年の旧盆のとき、ぜひ、ミンヌクのウサギムンをお供えされてみてはいかがでしょうか？お子さんたちの母親であることにSさんが自覚されるとき、その『崇るもの』『怖いもの』は、『大切ないのち』『感謝するべきいのち』へと変わっていくのではないのでしょうか。

Sさんの心の苦しみは痛いほど伝わってまいります。もう誰もSさんを責める人はなく、これからは過去の罪の意識にとらわれず、苦しみの肩の荷を下ろして、先立たれた2人のお子さんのお手本となるような、母として、女性として、そして同じ尊い『いのち』に恵まれた人間として、前向きな人生を歩んでいただければと思います。

※日本の宗派の中には、水子供養を行わない考え方もありますのでご注意ください。



絵・帰依 43子